

「ハムレット」に於るGHOSTについて

徳見道夫

はじめに

劇『ハムレット』に於ては、Ghostの果す役割は非常に大きい。我々はシェクスピアがこのGhostを導入する時に用いた数々の技巧から、彼がいかにかこのGhostの存在を大切にしたかを容易に推察できるのである。¹⁾ フランシスコは冷たい夜エルシノア城の歩哨に立っており、そこへバーナードが近づいて行く。本来ならば、フランシスコが“Who's there?” (I. i. 1.)²⁾と誰かすべきであるが、反対にバーナードがこの言葉を述べているのである。彼はフランシスコ以外に誰がそこにいると思ったのであろうか。バーナードから歩哨を交替してもらったフランシスコは、“For this relief much thanks, 'tis bitter cold, / And I am sick at heart.” (I. i. 8-9)と云って、何故か一人で歩哨に立つことを怖れているようである。“'tis bitter cold”は彼の精神状態を如実に示しているのである。しかし何故彼は“sick at heart”なのだろうか。観客はこの劇の最初から異様な雰囲気の中に引き込まれるのである。Ghostはホレイショーから“this thing” (I. i. 21)と呼ばれ、ついでマーセラスから“this dreaded sight” (I. i. 25)と表現されて、ついに彼の台詞の最後では、“this apparition” (I. i. 28)という明確な名称で呼ばれる。この言葉によって何故バーナードが神経質そうにフランシスコに“Who's there?”と呼びかけたか、そしてまた何故フランシスコが“sick at heart”なのかが観客に明らかにされる。しかしまだ観客にはどのような亡霊が、どんな姿で、何のためにこの冷たいエルシノア城に出てくるのか理解できず、息をのんで舞台上の人物達の会話に聞き入っているのである。バーナードが連夜現われる亡霊についてホレイショーに詳しく物語っている最中に、そのGhostは突然彼等の前に出現するのである。それは予期しなかった出来事なので当時の観客にはかなりの衝撃を与えたに相違ない。このようにシェクスピアはGhostを導入する時に細心の注意を払っており、彼がいかにかこのGhostの存在を大切にしたかを如実に示している。D. ウィルソンも述べている

1) 『ハムレット』劇に於るGhostの取扱いについては、T. Walter Herbert, “Shakespeare Announces a Ghost,” *Shakespeare Quarterly*, I (1950), 247-254を参照の事。

2) J. Dover Wilson (ed.), *Hamlet* (Cambridge University Press, 1971) 以下『ハムレット』からの引用は全て上記の版からのものである。

ように,³⁾ この Ghostこそは『ハムレット』に於る“Linchpin”(くさび)であり、主人公ハムレットと共に大切な登場人物なのである。それゆえ『ハムレット』に於る Ghostの存在意義を探究することは、取りも直さずこの劇と主人公ハムレットの神秘性(mystery)を解く大切な鍵となるものである。

第一章

W. W. グレグは『ハムレット』に於る Ghostは主人公ハムレットの幻想であると割り切って解釈しているが,⁴⁾ D. ウィルソンはこの見解を全面的に否定し、彼独自の理論を展開している。彼はこの Ghostを正しく理解するためにはエリザベス朝の人々の亡霊に対する考え方を我々はいつも念頭に置かなければならないとする。彼は研究の結果、当時の人々の亡霊に対する反応は3つのタイプがあり、それぞれ『ハムレット』の中に反映されているという結論に達した。すなわちマーセラスとバーナードーは伝統的なカトリック教徒的な考え方を持っており、亡霊は煉獄から現われる可能性があると感じている。またホレイショーは当時の懐疑的な考え方を代表しており、亡霊の存在を全く否定している。さらにハムレットはプロテスタント的な考え方を代表しており、死んだ人の魂が煉獄から人間世界に現われる可能性は皆無であり、亡霊は天使か悪魔の化身であると信じている。以上がウィルソンの提唱するエリザベス朝時代の人々の亡霊に対する反応の3つのタイプである。さらに彼は『ハムレット』に於る Ghostは煉獄から出現したものであり、Ghostはカトリック教徒だと結論づけている。彼の最大の理論的根拠はGhostがカトリックの最後の秘蹟を受けられなかったことを嘆いていることである。⁵⁾

Thus was I sleeping by a brother's hand,
Of life, of crown, of queen once dispatched,
Cut off even in the blossoms of my sin,
Unhouseled, disappointed, unaneled,
No reck'ning made, but sent to my account
With all my imperfections on my head. (I. v. 74-79)

だがウィルソンのGhost理論はR. バトンハウスによって徹底的に反論されている。⁶⁾ 彼は『ハムレット』

3) J. Dover Wilson, *What Happens in Hamlet* (London: Cambridge University Press, 1935), p. 52.

4) W. W. Greg, "Hamlet's Hallucination," *Modern Language Review*, XII (1917), 393-421.

5) D. ウィルソンの説はI. J. センパーやM. ジョセフから支持を受けている。我々は後に彼等の理論にも触れることになろう。

6) Roy W. Battenhouse, "The Ghost in *Hamlet*: A Catholic 'Linchpin'?", *Studies in Philology*, XLVIII (1951), 161-192.

徳見：「ハムレット」に於る GHOST について

に於る Ghost はキリスト教徒の考えるような煉獄から現われたのではないと主張し七つの理論的根拠を挙げている。一番目は、この Ghost は息子であるハムレットに彼の魂の救済を願っていないということである。煉獄の魂は当然自分の救済を親類縁者に強く要求するのであるが、Ghost の言葉は“Pity me not...” (I. v. 6) なのである。さらにこの Ghost は煉獄にいたために神から分離していることは嘆かず、自分の生前の所有物を失ったことを残念がっており、この事実はこの Ghost が煉獄の住人ではないことを示している。二番目にこの Ghost は自分の復讐を強くハムレットに命じていることである。煉獄に住んでいる魂は炎によって浄化され生前抱いていた恨みなどは忘れてはいるはずである。I. J. センパーは煉獄の魂も生前親しかった人に自分の復讐を命じる可能性もあるという証拠に、De Voragine の *The Golden Legend* の一節を引用しているが、⁷⁾ *The Golden Legend* の亡霊と『ハムレット』に於る Ghost とは何の関連性もない。彼の指摘している亡霊はただ悪人に「地獄にお前は落ちるぞ」と警告しているだけである。三番目にバトンハウスはこの Ghost はあまりに傲慢であり煉獄で浄められた魂ではないと主張している。この Ghost は自分自身を“a radiant angel” (I. v. 55) とし、彼の弟であるクローディアスを“garbage” (I. v. 57) と呼んでいるのである。しかしこの Ghost の態度は I. J. センパーによって上手く弁護されている。すなわちシェクスピア劇に於ては、悪玉は自分をはっきりと悪人と語り、善玉は公然と観客に自分は善人であると告げるのである。⁸⁾ 四番目にこの Ghost は煉獄の魂であれば当然満足させるべき条件を満たしていないことをバトンハウスは主張している。その条件とは四つあり以下のようなものである。

- ① もし亡霊が善霊ならば、それは最初は人を恐怖に陥し入れるが、すぐに慰めるような態度をとる。
- ② 善霊は鳩や人や小羊の姿で現われたり、明るい日光の中で現われる。しかし亡霊がライオンや熊や蛙や蛇や猫などの姿で現われたら、それは明らかに悪霊である。
- ③ 亡霊が十二使徒や教会によって認められた博士達の教義とは違ったことを教えるかどうか、あるいはローマ教会の掟に定められている信仰や善行や儀式と異なったことを話さないかどうか我々は注意しなければならない。
- ④ 亡霊の言葉や行為や動作に罪を認めるような謙遜な心を示しているかどうか、あるいは亡霊がうなったり不平を言ったり威嚇したり中傷したりしないかどうか我々は注意すべきである。

バトンハウスによれば、『ハムレット』に於る Ghost は上記の条件を一つも満たしていない

7) I. J. Semper, “The Ghost in *Hamlet* : Pagan or Christian ?”, *The Month*, IX (1953), 227.

8) I. J. Semper, 229.

ことになる。Ghost はハムレットを慰めもせず、結局は彼を極度の苦悩に陥し入れる。さらに Ghost は明るい日光の下に現われないで深夜にしかもものものしい武具を身にまとして現われている。これは明らかに第二番目の善霊の条件に当てはまらない。また Ghost はハムレットに復讐を強く要求しており、あの世からこの世に現われた主な理由は自分の恨みをはらすためである。この Ghost の態度は勿論教会の教義に反している。第4番目の条件もこの Ghost は満していない。何故なら Ghost は煉獄の罰に不平を洩らしているからである。“O, horrible! O, horrible! most horrible!” (I. v.80) さらに, Ghost は妻であるガートルードや弟であるクローディアスを激烈な言葉で責めるのである。

Ay, that incestuous, that adulterate beast,
 With witchcraft of his wit, with traitorous gifts,
 O wicked wit and gifts, that have the power
 So to seduce ; won to his shameful lust
 The will of my most seeming - virtuous queen ;
 O Hamlet, what a falling - off was there !
 From me whose love was of that dignity,
 That it went hand in hand even with the vow
 I made to her in marriage, and to decline
 Upon a wretch whose natural gifts were poor
 To those of mine ;
 But virtue, as it never will be moved,
 Though lewdness court it in a shape of heaven,
 So lust, though to a radiant angel linked,
 Will sate itself in a celestial bed
 And prey on garbage. (I. v.42-57)

以上見てきたように『ハムレット』に於る Ghost は、カトリック教徒の考える善霊の四つの条件を一つも満たしていない。このことからバトンハウスはこの Ghost を煉獄の魂ではないと結論づけている。

バトンハウスの主張する第五番目の証拠は主人公ハムレットがこの Ghost を決して煉獄の魂ではないと考えていることである。ハムレットにとって亡霊は天使か悪魔なのであってその中間的存在は考えられないのである。例えばハムレットが初めて Ghost と対面した時、彼は“ Bring with thee airs from heaven, or blasts from hell, ...” (I. iv.41) と言い、明らかに煉獄の存在は考えていないのである。六番目のバトンハウスの主張はハムレット以外の

徳見：「ハムレット」に於るGHOSTについて

登場人物もこのGhostが煉獄に住んでいるとは信じていないことである。例えばホレイシヨールは“ And then it [the Ghost] started like a guilty thing, / Upon a fearful summons ;...” (I. i.148-149) と言って、Ghostが鶏の鳴き声に怯えたように突然消えたことに疑いを持っているのである。何故なら鶏の鳴き声は神聖なもので悪霊を追い払う力を持っていると昔から信じられていたからである。またホレイシヨールはハムレットが危険も顧みずGhostの後について行こうとした時、『リア王』のエドガーの言葉に似た忠告をハムレットに与える。

What if it tempt you toward the flood, my lord,
Or to the dreadful summit of the cliff
That beetles o'er his base into the sea,
And there assume some other horrible form,
Which might deprive your sovereignty of reason,
And draw you into madness ? (I. iv.69-74)

彼の言葉はGhostが悪魔ではないかという彼の疑いを明白に示している。またバトンハウスによればガートルードが寝室の場面でGhostが見えなかったのは、Ghostが異教徒の考える地獄から現われてきたので敬虔なキリスト教徒であるガートルードとは全く無縁の存在だったからということになる。第七番目にバトンハウスは結論としてある一定の期間煉獄にいて生前の罪を浄めるという考え方は全く異教徒的であると主張している。それゆえこのGhostはキリスト教徒の考える煉獄から現われたものではなく、異教徒の黄泉の国(Pagan Hades)から現われたものであり、このGhostが本当にカトリックの秘蹟を信じていたかどうか疑わしいと彼は考えている。

第二章

バトンハウスの理論の展開は緻密で説得力があるが、このGhostを「古典的亡霊」(Classical Spirit)と断言することは困難なように思われる。何故なら『ハムレット』はキリスト教的色彩をかなり強く持っているからである。例えばマーセラスは第一幕一場でGhostが舞台上から去った後にキリスト降誕祭を美しく述べている。

Some say that ever 'gainst that season comes
Wherein our Saviour's birth is celebrated
This bird of dawning singeth all night long,
And then they say no spirit dare stir abroad,
The nights are wholesome, then no planets strike,

No fairy takes, nor witch hath power to charm,
So hallowed, and so gracious is that time. (I. i.158-164)

またこの Ghost はカトリック最後の秘蹟を受けられなかったことを嘆いているのである。⁹⁾ I. J. センパーも主張しているように,¹⁰⁾ バトンハウスが Ghost の秘蹟を信じていないと主張しているのは明らかに行き過ぎである。しかし、この Ghost が単なるキリスト教的煉獄から現われたものではないことを見破ったことは、彼の鋭い批評眼を物語っている。

ではこの Ghost が異教徒の考える黄泉の国から現われた亡霊でないとすると、キリスト教的色彩を持つ悪魔なのであろうか。E. プロッサーは彼女の著書の中でこの説を積極的に支持している。¹¹⁾ 彼女はバトンハウスがこの Ghost を異教徒的亡霊と結論づけたのに対して、キリスト教に敵対する悪魔であると主張している。だが彼女の理論の展開方法はバトンハウスのそれと類似している。彼女によれば、第一幕一場で Ghost が突然消えた理由はホレイショーが “by heaven I charge thee speak.” (I. i.49) と言って Ghost に話すことを命じたからである。何故なら悪魔である Ghost は悪魔払いの言葉である “by heaven ” という言葉に怯んだからである。Ghost が二度目に消えたのはバトンハウスも言及しているように鶏の鳴き声のためである。前にも述べたように鶏の鳴き声は古来よりキリストの声の象徴であり、悪魔を追い払う力を持っているのである。また彼女は地下室の場面に於て Ghost が地下から話しているのは悪魔である証拠に他ならないと主張している。¹²⁾ 以上の事柄を総合して彼女はこの Ghost をキリスト教的色彩を濃厚に持っている悪魔だと結論づけている。しかしながら、Ghost が悪魔であると簡単に割り切るとどうしても解けない問題点が出てくる。それはこの Ghost のガートルードに対する暖かい思い遣りである。ハムレットに復讐を命じた Ghost は、ガートルードには危

9) D. ウルソンもこの点に関して次のように述べている。 “But, though here he [Shakespeare] is no doubt using material borrowed from his source, he takes care to strike the Christian note in the very first scene, in order to make it clear that his Ghost is a Christian one ” (*What Happens in Hamlet* , p. 68).

10) I. J. Semper, 230.

11) Eleanor Prosser, *Hamlet and Revenge* (Stanford : Stanford University Press, 1971).

12) この Ghost を悪魔と考えない説を支持している一派にとってこの問題は非常に困難である。例えばD. ウィルソンは次の様に言っている。 “In a word, father and son seem to be playing into each other’s hands in order to hoodwink an inconvenient witness Marcellus ” (p. 81). 又 I. J. センパーも歯切れの悪い説明をしている。 “The descent of the Ghost through a trapdoor in the floor of the stage, an exit usually reserved for demons, was a grotesque bit of stage business ; but Shakespeare had no choice in the matter ” (p. 226). だがこれはあまり難しく考える必要はなく、シェクスピアは単にこの Ghost の超自然性を観客に訴えているだけではないだろうか。とにかく舞台の下で Ghost が話すからすぐ悪魔だと結論づけるのは早計と思われる。

徳見：「ハムレット」に於るGHOSTについて

害を加えるなど念を押す。

But howsomever thou pursues this act,
Taint not thy mind, nor let thy soul contrive
Against thy mother aught —leave her to heaven,
And to those thorns that in her bosom lodge
To prick and sting her. (I. v. 84—88)

E. プロッサーはGhost のガートルードに対する思い遣りは悪魔が天使を装うための策略だと解釈している。確かにこれは悪魔の罫かもしれない。というのは『マクベス』においてバンコも気づいているように真実さえも悪魔は自分の武器として使うからである。

...often times to win us to our harm,

The instruments of darkness tell us truths ... (I. iii. 123—124)¹³⁾

オセローを破滅させたイアゴーもこの点について次のように明確に述べている。

Divinity of hell!

When devils will their blackest sins put on,

They do suggest at first with heavenly shows ... (II. iii . 356—358)¹⁴⁾

しかし『ハムレット』に於るGhost は果して主人公ハムレットの信用を得る必要があったであろうか。ハムレットは最初からGhost の言葉を真実として受け取っているのである。彼のGhost に対する反応：

Haste me to know't, that I with wings as swift

As meditation or the thoughts of love ... (I. v. 29—30)

が雄弁にそのことを証明している。しかも、Ghost は命令の一番最後にガートルードに対する寛容をハムレットに説いたのである。もしGhost がハムレットの信用を得たいと思うならこの命令は最初に与えるはずである。このGhost は、生前妻であったガートルードに対する愛を未だ失っていないのである。それゆえハムレットが逆上のあまりガートルードを肉体的にも精神的にも傷つけはしないかと怖れたので、ハムレットに強く母親には手を出すなど忠告したのである。

第三章

第三幕四場のハムレットとガートルードとの会見の場面でGhost のガートルードに対する思い遣りは明白なものとなる。¹⁵⁾ハムレットは第一幕五場でGhost から与えられた命令を忘れて

13) J. Dover Wilson (ed.), *Macbeth* (London: Cambridge University Press, 1970)

14) J. Dover Wilson (ed.), *Othello* (London: Cambridge University Press, 1971)

15) 参照 F. W. Moorman, "Shakespeare's Ghost," *Modern Language Review*, I (1906), 201.

ガートルードに対して激烈な非難の言葉を浴びせ、彼女の心を二つに割いてしまう。

“O Hamlet, thou hast cleft my heart in twain.” (III. iv.156)

Ghost がハムレットの怒りが最高点に達した時に現われたことは注目に価する。Ghost はハムレットがガートルードを傷つけるのではないかと怖れて彼の怒りを抑えるために現われたのである。ハムレットも母に会う前に決してネロのように残酷な行為をすまいと決心するが、その言葉は彼自身母を傷つけはしないかという怖れを抱いていることを端的に示しているものである。

O heart, lose not thy nature, let not ever

The soul of Nero enter this firm bosom,

Let me be cruel not unnatural.

I will speak daggers to her, but use none. (III. ii.396-399)

ハムレットの性格を熟知していた Ghost は彼が逆上のあまりガートルードに危害を加えるのではないかと心配して第一幕五場に於て彼に母親には決して手を出すなと忠告したのである。このような Ghost 解釈はあまりに人間的過ぎて Ghost の持つ鬼気迫る迫力を奪うものであろうか。私にはそうは思われぬ。何故なら『ハムレット』劇の進行役を果しているホレイショーはこの Ghost のことをハムレットに報告する時、“A countenance more in sorrow than in anger.”

(I. ii.232) と述べているからである。周知のようにホレイショーはこの劇に於ては積極的な役割を果してはいず、いわばこの劇の推進役である。例えば当然知っているはずのデンマークの風習をわざわざハムレットに彼が尋ねるのは劇の進行上必要だからである。それゆえシェクスピアが上記の言葉をホレイショーに語らせた事実は観客に彼の言葉は真実であることを伝えたかったということを示している。すなわちこの Ghost はガートルードの罪とクローディアスの兄殺しの罪に対して怒っているよりも深く嘆いているのである。ここにシェクスピアの独創性がある。彼はこれまでのセネカ風の単純な亡霊よりも複雑な Ghost を創造し、エリザベス朝の人々に新たな恐怖を与えたのである。彼の描く Ghost はより人間化され人間的感情を強くその顔に現わしているのである。P. N. シーゲルも次のように述べている。「シェクスピアの Ghost は荘重でより人間性を与えられている点に於て他のエリザベス朝劇の亡霊よりもすぐれている。」¹⁶⁾ さらにこの Ghost が寝室の場面に出現した理由はもう一つある。それはD. ウィルソンも指摘しているように、¹⁷⁾ハムレットがクローディアスの悪行をガートルードに打ち明けるのを防ぐためである。彼女はその恐ろしい秘密を知ってもなお泰然としている程強い心の持主ではない。彼女はすぐ オフィーリアのように発狂してしまうであろう。Ghost は自分の妻であった女性

16) P.N.Siegel, “Discerning the Ghost in *Hamlet*,” *PMLA*, LXXVI (1961), 148.

17) J. Dover Wilson, *What Happens in Hamlet*, p. 252.

徳見：「ハムレット」に於るGHOSTについて

がそのように苦しむことに堪えられなかったのである。ハムレットが“A bloody deed — almost as bad, good mother, / As kill a king, and marry with his brother.”

(III. iv. 28—29) という言葉によって間接的にクロードの兄殺しの罪をガートルードに教えたことになると反駁されるかもしれないが、この時彼女はハムレットの言葉を完全に理解していないのである。また彼女の反応は彼女がハムレット王殺しに加担していないことを明白に示している。

だがここに一つ大きな問題が残っている。それは何故ガートルードに Ghost の姿が見えなかったかということである。この問題に関しては昔から多くの解答が提出されている。A. C. ブラッドリーは Ghost がガートルードにショックを与えないように配慮したためだと考えており¹⁸、D. ウィルソンはガートルードは、姦淫という罪のため Ghost が見えなかったのだと解釈している¹⁹。また E. プロッサーは Ghost は悪魔であるという説に固執して Ghost が寝室の場面で現われたのはガートルードの心からの懺悔を阻止するためであり、又 Ghost がガートルードに姿を見せなかったものと同じ理由からであると主張している²⁰。彼女はエリザベス朝時代の亡霊論に感わされこの Ghost の言葉を『ハムレット』というコンテキストの中で吟味することを怠っているのである²¹。寝室の場面で Ghost が語る数少ない言葉の中には最初の二行にはハムレットの義務怠慢に対する非難が見られるが、残りの四行はガートルードに対する暖い言葉に満ちている。

Do not forget! this visitation
Is but to whet thy almost blunted purpose —
But look, amazement on thy mother sits,
O step between her and her fighting soul,
Conceit in weakest bodies strongest works,
Speak to her, Hamlet. (III. iv. 110—115)

この Ghost の言葉をガートルードに対する思い遣りと反対に取る解釈は明らかに間違っている。Ghost がハムレットとガートルードの会場の場面にわざわざ出現したのは二つの理由のためである。第一は勿論ハムレットの鈍りがちな復讐心を駆り立てるためである。何故なら彼はこの直前の場面に於て無防備のクロードをみすみす見逃しているのである。第二の理由はハムレットが Ghost の命令を無視してガートルードに危害を加えそうだったからである。Ghost の去

18) A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London: Macmillan & Co. Ltd., 1969), pp. 111—112.

19) J. Dover Wilson, *What Happens in Hamlet*, p. 254.

20) Eleanor Prosser, pp. 198—200.

21) Roy W. Battenhouse のこの問題に対する考え方は既に示しておいた。

った後、ハムレットは正気に戻り諄々と母に徳の道を説きはじめるのである。

第 四 章

以上考察してきたように「Ghost = 悪魔」説ではどうしても Ghost のガートルード に対する愛情は説明のつかない問題である。E. プロッサーはこの説に固執するあまり寝室の場面に於る Ghost の言葉の解釈を誤ったのである。だが、D. ウィルソンや I. J. センパーや M. ジョセフらが主張する「Ghost = 煉獄の魂」説はこれまで見てきたようにバトンハウスから徹底的に反駁されており、センパーがいくら彼の主張を押し通してもバトンハウスの理論の前では破れざるを得ないのである。ここで我々はこの Ghost を理論で割り切ろうとする態度が誤りであることに気付いてくる。『ハムレット』に於るこの Ghost は曖昧という霧に包まれている。

R. H. ウェストはこの Ghost の持つ矛盾を次の様に的確に表現している。

First, of course, if he wanted the apparition understood to be a devil, he must have eliminated the ghost's concern for Gertrude. Or, if he wanted us to recognize it as a ghost from a paganish purgatory, he must have eliminated its words on Catholic last offices. Or, finally, if he wanted us to regard it without impediment as a saved Christian soul acting as an instrument of God's wrath and justice, he must have eliminated the ghost's personal vindictiveness.²²

以上の様な理論的矛盾がこの Ghost には存在し、どのような理論でもこの矛盾は解決し得ないことは今まで見てきた通りである。我々はこの Ghost の矛盾は矛盾としてそのまま受け取らなければならない。では何故シェクスピアはこのような曖昧性を彼の創造した Ghost に付与したのであろうか。ウェストはシェクスピアが意識的に観客に興味を湧かせるためにこの Ghost に相矛盾する性質を与えたのであると指摘している。確かにこれまで見てきたようにこの Ghost はエリザベス朝時代の亡霊に対する神学理論ではどうしても説明できないものを持っているのである。この点に関しては二つの可能性が考えられる。それはシェクスピアが当時の亡霊に対する理論に全く無知であったか、あるいは意識的に彼の創造した Ghost に理論では割り切れない曖昧性を与えたかである。最初の考えは全く問題にならない。何故ならもしシェクスピアが当時の亡霊論に全く無知であればこれほど微妙で複雑な彼独自の Ghost を創造できなかったであろう。彼は全ての亡霊理論に熟知しておりなおかつ理論では割り切れない Ghost を舞台上に出現さ

²² Robert H. West, "King Hamlet Ambiguous Ghost," *PMLA*, LXX (1955), 1113.

徳見：「ハムレット」に於るGHOSTについて

せ、エリザベス朝の人々に底知れぬ恐怖を与えたのであった。²³

だが何故シェクスピアはエリザベス朝時代の亡霊論を舞台上で展開しながらも、なおかつ Ghost に曖昧性を持たせたのであろうか。それは彼が意識的に Ghost に当時の理論では矛盾する性質を与えることによって、この現実に対していかに理論は空しいものであるかを強調したかったからである。その証拠にハムレットはホレイシヨールに次の様な有名な言葉を語りかける。

“There are more things in heaven and earth, Horatio, / Than are dreamt of in your philosophy” (I. v.166-167). この言葉は理論では割り切れない現実が存在することに対するハムレットの確信を示しており、この言葉こそ Ghost が当時の理論を超越して存在していることを示す有力な証拠である。ホレイシヨールは Ghost を見た途端、この世に亡霊の存在することは率直に認めたが、彼の持っている理論でこの Ghost を割り切ろうとしたのである。亡霊の存在を認めた後も “Stay, illusion!” (I. i.127) という彼の言葉は、彼の精神がいかに融通性を欠いているかを明白に示している。ホレイシヨールよりもっと心の広いハムレットはすぐこの Ghost が理論を越えた存在であることを実感として感じとり、前に引用した有名な言葉を語るのである。この場合の “your” とは勿論「ホレイシヨールの」ではなく「人間一般の」という意味である。シェクスピアはこの台詞をハムレットに語らせることによって、我々にこの Ghost は理論を超えた現実そのものであることを強調しているのである。彼の提出した Ghost という現実是我々のいわゆる哲学では割り切れないものである。彼はこの Ghost によって我々の（そして勿論ハムレットの）信念を打ち破って新しい次元の現実到我々を向かわせているのである。R. H. ウェストも次のように味わうべき文章を書いているので引用しておこう。

I mean only that the best account we can give of the ghost does not take us, as a self-assured pneumatology does, into the country from whose bourne no traveller returns, but that it leaves us where all living men must stand in relation to that country ; weighed with its awe and terror and its uncertainties, buffeted by conflicting theories and visions of it, at last making our own responses as we can — largely from our guides.²⁴

P. N. シーゲルはこの Ghost をセネカ風の復讐を強要する亡霊とカトリック的な煉獄の

23) Harry Levin もこの点に関して次の様に述べている。(Harry Levin, *The Question of Hamlet*, Oxford University Press, 1959) “Shakespeare refined upon this material by surrounding it with mystery” (p. 56).

24) R.H.West, 1116.

魂と通俗的な墓場に出る幽霊の混合物であるという苦しい説明を行っているが、²⁵⁾ その様にこの Ghost を割り切って理解してはこの Ghost が『ハムレット』に於て持つ意味を半減してしまう。大切なことはこの Ghost は理論では説明できないものであり、それゆえ人間の考え出した理論を超越した現実そのものであるということである。この理論では割り切れない Ghost の出現のためにハムレットは彼がこれまで持っていた世界観や人生観を打ち捨てなければならなくなり、また彼はこれから自己のための理論の再確立という苦しい仕事を成し遂げなければならない。次に引用する彼の言葉は彼の深い苦悩を端的に物語っているものである。

Yea, from the table of my memory

I'll wipe away all trivial fond records,

All saws of books, all forms, all pressures past

That youth and observation copied there.... (I. v. 98-101)

しかしこれまでの全ての理論を放棄した後にハムレットの頭に入ってきたものは、

O most pernicious woman!

O villain, villain, smiling, damned villain! (I. v. 106-107)

という深い人間不信である。この時ハムレットにとってはガートルードは女性の、またクロードは男性のそれぞれ代表となっているのである。これまで無邪気に信じていた母の墮落と“appearance”と“reality”との完全な相違に対する苦い認識がこれからハムレットが構築しなければならない理論の根底を成すものである。果してこれらの事実からどのような結論が引き出され得るのか。ハムレットの認識した事実は確かに真実である。しかしそれは空虚な真実なのである。このように Ghost はハムレットのこれまでの人生に対する信頼を絶滅させ、彼を苦悩のどん底に落すのである。

おわりに

以上見てきたように『ハムレット』に於る Ghost は理論で割り切れない存在であり、理論を超越した現実そのものである。主人公ハムレットはこれまで抱いていた彼の人生観・世界観を Ghost の出現のために打ち破られ、これから自分自身で自分自身の理論を作り上げなければならないのである。そして彼がこれから構築する人生観の根底となるものは彼の苦い現実認識である。彼がこれから成し遂げようとする仕事は絶望的なように見える。それでも、彼は自己の再確

²⁵⁾ P. N. Siegel, 148. 彼の理論は Geoffrey Bullough によっても支持されている。(Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* VII, Routledge and Kegan Paul, 1973) “But we should not exaggerate the doctrinal strictness of Shakespeare's approach or assume that he was a Catholic ... P. N. Siegel was right to insist ...” (p. 27).

徳見：「ハムレット」に於るGHOSTについて

立のために、また父の復讐を遂行するために、一人で厳しい道を進まねばならないのである。この時から彼の真の苦闘が始まるように思われる。

(論文受理1975・9・16)